

戦後日本の桃太郎(一)

——奈街三郎「ただの桃太郎」をめぐって——

武 久 康 高

— はじめに —

一九四六年九月、児童文学者協会の機関誌として生まれた『日本児童文学』創刊号には、「侵略戦争の過去と民主革命下の現在を通じて作家は何を反省し何を実践せんとしてゐるのか」といった文言のもと、「一、児童文学の再出版に際して作家として最も反省すべき点。二、再出版に当つての抱負」の二つを問うた会員アンケートの結果が載せられている。「回答を求められた作家自身の内面的な反省の声をききたかつた」とその理由が明かされるように、協会や機関誌の立ち上げにあたり、編集部としてはまず会員自身の「内なる戦争責任の明確化から出発しようとした」のであろう。しかし、会員からの回答は「省みて他をいふやうな」ものや「あまりに一般的な原則論を送つてきた」ものが多く、編集部を失望させたようである。そんななか、協会の常任委員であつた奈街三郎は次のような

回答を寄せている。

(ぼくなどは初めから大して文学的業績もない男だから、これもうぬばれかもしれないが——) 人からかれこれ言はれない先にまたじぶんのことをたなにあげて人のことを言ふまへに、ぼくはまづ自己の不明をあからさまにぶちまけ、痛烈に愧入り、深刻に詫びたい気もちでいつばいだ。／＼したがつて、この気もちの上にはか再出版のふり出しはありえない。作家としての真摯な自己反省、するどい自己批判のメトオドは、やはり今後の作品行動にしかないだらう。それはいはゆる、徐々に成長する結晶体の偉大な忍耐でなければならぬと思ふ。

奈街は「児童文学界の戦争責任明確化及び戦責出版社七社への不執筆動議」の提案者であり、さらに「児童文学肅正委員会」の委員にもなっている。そんな彼の作家としての自己反省・自己批判の方法とは、「自己」の不明をあからさまにぶちまけ、痛烈に愧入り、深刻

に詫びたい気もち」を「今後の作品行動」にうつすしかないというものであった。つまりここで奈街は、「内なる戦争責任」というものを「今後の作品行動」の中で明確化していくと述べているのである。

そこで本稿では、そうした奈街の「作品行動」の一端について、彼が書いた学校劇用脚本「ただの桃太郎」（日本学校劇選（小学校篇）櫻井書店、一九五〇・三）の分析を通じて明らかにしたい。周知のように桃太郎は、日本の象徴として戦前・戦中に様々な場面で利用されてきた。しかし終戦直後には、「桃太郎の話は日本帝国侵略主義の象徴ですよ」（戸塚文子「桃太郎の話」）など侵略主義や軍国主義の象徴とされ、さらにそこから、戦時下に子どもたちに対しておこなわれた「桃太郎教育」への反省がなされていったのである。

倫理的には全く白紙の状態にある幼児にむかつて語るお伽噺の影響力の大きさを、これまで等閑に付してゐたことは、何といつても重大な過失です。子供たちは、——少くとも男の子たちは、——桃太郎の話をきいて、他民族を征伐することの痛快さや、戦利品を山と積んで凱旋する素晴らしさに眩惑されて、「力は正義なり。」といふ間違つた文句の中に、人間の最高の道徳をみいだしがちです。その結果が、今度の戦争中になされた数々のはづかしい行為でなくて何でせうか。「日本男子の正体みたり。」と外国人の人々から後指をさされるやうになつたのも、もとはと言へば桃太郎教育にあつたことを私たちはこ

の際痛感すべきだと思ひます。／戦時中は、「強い子よい子」といふ極端な標語まで出来て、いやが上にも日本の男の子を桃太郎に仕上げようとの企てがありました。でも今はもう、軍国調はすべて払拭されてよい時期が来てゐるのです。

（山地延枝（寓意随想）桃太郎）
引用箇所では、「力は正義なり」といつた軍国調の思想を「倫理的には全く白紙の状態にある幼児にむかつて」植え付けてきた戦時下の「桃太郎教育」の払拭が叫ばれているのだが、こうした終戦直後の桃太郎をめぐる状況のなか、奈街は小学生に向けて桃太郎を如何に描き、そこにどのような思いを重ねていったのであろうか。以下、検討したい。

二 復員兵の桃太郎

学校劇用脚本「ただの桃太郎」は、桃太郎が鬼が島から日本に帰国する場面からはじめられている。

「桃太郎さん」の唱歌。／それから、幕。——間。

汽船到着の汽笛、鳴りつづき——

女の声 おかえりなさいませ。ながながと、ごころうさまでした。おかえりなさいませ……。

この声、だんだん大ぜいの声になつてつづき、やがてしずかになると、右手から桃太郎が、ゆつくりと出てくる。日の丸のはちまき

をしめ、「日本一の桃太郎」と書いた旗印を背にしよつてはいるが
太刀も扇子もない丸腰で、なつかしそうにあたりをながめ、また空
を見あげたりして、

桃太郎 やれやれ、まったく夢のようだなあ、こうして、ぶ
じにかえれようとは。……やつぱり、日本はいいなあ。鬼が
島よりいいなあ。

じつと遠方を見つめて、

桃太郎 うーむ、ひどくやられているなあ。話にはきいてい
たが、まさか、こんなひどいとは思わなかったよ。まる
で、一めんのやけ野原じゃないか。——よくもまあ、こんな
にやられるまで、国民が、がまんをしていたもんだなあ……

本来なら犬猿雉に宝物を引かせ凱旋するはずの桃太郎。しかしこ
こでは、「日の丸のはちまき」や「日本一」の旗印はあるものの、
太刀や扇子もない丸腰のまま帰国している。「まったく夢のようだ
なあ、こうしてぶじにかえれようとは」「日本はいいなあ。鬼が島
よりいいなあ」といったセリフからは、本脚本の桃太郎が鬼が島で
終戦を迎え、やつとの思いで帰国を果たしたことが窺えよう。

さて、このように本脚本は桃太郎の帰国シーンから始められてい
るのだが、同じように桃太郎の帰国に言及する話は終戦後発刊され
た雑誌にも多数見られ、そこの桃太郎は戦犯容疑をかけられた軍
国主義者として表象されていた。たとえば「女性ライフ」一九四七

年一月号には次のような話が載せられている。

「鬼が島征伐」とかで意気揚々故国へ凱旋した筈の桃太郎將軍、
実は鬼ヶ島征伐とは真赤なウソでとんでもない侵略者と判明。
現在第一級戦犯容疑者としてスガモ収容中との事。なほカスマ
タ金銀サンゴあやにしきは現地の所有者に返還中、お供のサ
ル、イヌ、キジは今更軍国主義者に踊らされた前非を悔悟、そ
れぞれ故郷へ帰農食糧増産に努力中。（「お伽バナシの後」）

こうした語りの存在は、この当時、軍国主義者の象徴として桃太郎
が捉えられていたことを窺わせるものである。むしろ本脚本に関し
ても、太刀こそないが「日の丸のはちまきをしめ、「日本一の桃太
郎」と書いた旗印を背にしよつて」帰国する姿は、そのまま軍国主
義の推進に利用された戦時下の桃太郎を彷彿とさせるものであろう。

桃太郎 戦争ではくは、刀と扇子もなくしてしまった。けれ
ど、日本一の桃太郎という旗印だけは、だいじに持つてかえ
つた。

引用は、桃太郎と犬猿雉とが再会を果たした後のものである。この
セリフからも窺えるように、「日本一の桃太郎」という旗印は、た
とえ戦争が終わっても捨てることのできない、桃太郎がそのアイデ
ンティティを重ね合わせる象徴的なアイテムとして存在していた。
なお、こうした「日本一」の旗印を鳥越信は、「軍国主義」の
「精神的象徴」と指摘するのだが、この鳥越の見解に基づけば、

ここでの桃太郎は終戦を迎え帰国したものの、未だ戦時下の軍国主義的価値観を捨て切れない復員兵として表象されているといえよう。

しかし、どうしてここで桃太郎は復員兵として描き出されているのだろうか。木村卓滋は、終戦直後の日本社会では反軍・反軍人意識が広がっており、その批判の対象は軍指導層のみにとどまらず復員兵をも含んでいたと指摘している。また、ここでの批判としては、「我々元軍人が何時までも独り戦争責任者の如くせしられているのは国民が大東亜戦争の真の意義も実情も外国と比することも知らない無智から起つておるとも考えられますし」の如く、彼ら元軍人を戦争責任者とする言説があつたようである。

このように終戦直後には、復員兵ら元軍人を戦争責任者として批判する言説が存在した。その一方で、桃太郎は軍国主義者の象徴とされ、「帰国後、第一級戦犯容疑で収容」などといった話が多数作られた。つまり復員兵と桃太郎とは、終戦直後に「戦争責任者」として語られたという点で共通しており、そうした理由もあいて、本脚本では桃太郎が復員兵として設定されていると考えられよう。

三 戦後日本と逆コース

本脚本ではその後、桃太郎の前にそれぞれ「日本一のかげぐすり」、「日本一のきびだんご」という旗印をもった薬屋、団子屋があらわれ、その「日本一」の旗印を信じた桃太郎はまんまとニセモノ

を買わされてしまう。「ああ、日本はすっかりかわってしまったのだ」とうなだれるなか、「軽快なジャズ音楽」が流れ、舞台には「日本一の小学目ぐすり」「日本一のおしめカバー」など続々と「日本一」を称する者たちが登場する。そんな状況に桃太郎は、自分の「日本一」の旗印を破いて捨ててしまうのであった。

さて、ここで桃太郎は「日本一」を標榜する売り子たちに騙され、「日本はすっかりかわってしまった」とうなだれている。その後、「軽快なジャズ音楽」とともに多くの「日本一」を称する売り子が登場することからも、この日本の変化がアメリカ文化の流入と関係づけられていることは確実であろう。なお、こうしたアメリカ文化による日本の墮落といった言説は、当時の左派に広範に認められるものであった。一例として、ソ連教育学の研究者である矢川徳光の発言を引用しておく。¹⁰

日本は文化的にも自主権をもっていない。(中略)街に流れる音楽は、歯のうくような類魔的な植民地的旋律によって日本民族の耳を毒し、民族の子どもたちの精神の随までも腐らせている。

(矢川徳光「民族問題と教育」)

このように日本が自主権をもたない植民地的な状況だと言説は、アメリカが「東側陣営との対決のため」に「民主化を重視した従来の対日政策を大きく転換させ」る、¹¹日本の民主化・非軍事化に逆行する動き(逆コース)の進展とともに増加していく。ちょうど本脚

本が出版された一九五〇年三月は朝鮮戦争前夜であり、人々は少しずつ進んでいく逆コースの動きを肌で感じていた。例として、児童雑誌の編集に関わっていた高山毅の文章を引用しよう。¹²

最近保守反動的な傾向が強まりつつあることは事実である。ネオ・ファシズムの抬頭のおそれなしとしない状態となっている。これに抵抗して日本の民主化を逆行させないように、そして前進せしめることこそ、われわれの今日の任務であるが、しかし、それ故にこそ、ほくは「保守反動的な児童読物の氾濫」というだけで児童文学者がすましてはならぬと考えるのである。

(高山 毅「児童文学の危機」)

「民主化を逆行させ」るような「ネオ・ファシズムの抬頭のおそれ」。人々が危惧するこうしたアメリカ主導による軍事化の復活という状況が、本脚本では、「軽快なジャズ音楽」とともに続々と「日本一」の旗印を持った者たちが登場するシーンに象徴的に表現されているのである。またそこでの「日本一」の旗印には、逆コースの進展とともに日本国内で復活しつつある軍国調の動きが象徴されているといえよう。

四 「日本一」の旗印と桃太郎

ところで本脚本においては、こうした「日本一」を称する売り子たちの登場を見、桃太郎は自分の「日本一」の旗印を破いて捨てて

しまう。前述したように「日本一の桃太郎」という旗印は、戦時下から引き続き、桃太郎がそのアイデンティティを重ね合わせてきた象徴的なアイテムであった。しかしここでは、そうした「日本一」の旗印が破り捨てられてしまうのである。

次に引用するのは、桃太郎と大猿雉とが再会を果たし、もう戦争はこりこりだなど言い合うなか、どうして桃太郎は「日本一」の旗を捨てたのかという話になる場面である。

桃太郎 戦争ではくは、刀と扇子せんすもなくしてしまった。けれど、日本一の桃太郎という旗印だけは、だいじに持ってかえた。

いぬ それをまた、どうして？

桃太郎 いや、かえてみたら、日本一なんて、とんでもないうぬほれさ。日本一というのに、ろくなものはありやしない。ほくだって、同じことさ。だから、ほくはきょうから、日本一の桃太郎じゃない。ただの桃太郎だよ。

といって、竹竿を後方へすてる。みんな、しんとして桃太郎を見る。——聞

ここで桃太郎は、戦時下から自己がアイデンティティを重ねてきた「日本一」という称号について、それは「うぬほれ」であり「ろくなものはありやしない」と否定する。そして、「ほくだって、同じことさ」と、「日本一」と称してきた自己を自嘲気味に語るのである。

前節で指摘したように、「軽快なジャズ音楽」のもとに多くの「日本一」の旗印が登場するシーンには、アメリカ主導による軍事化の復活という当時の状況が象徴されていた。また、そうした「日本一」の群れを目の当たりにし、桃太郎は「日本一」の旗印を破いて捨ててしまふわけだが、そこには「ほくだって、同じことさ」という、自分の過去と現状との共通性を見通すまなざしも存在していた。ここには、「日本一」の桃太郎」話をもって、同じように軍国調の推進に寄与してきたことへの自覚と反省の念が示されるとともに、「軍国主義」の「精神的象徴」である「日本一」の旗印を破り捨てる桃太郎を描くことで、今後、すべての軍国調が払拭されるべき必要性が語られているといえよう。

五 おわりに

児童文学者が抱える「内なる戦争責任」は、「作品行動」の中で明確化していくしかないとする奈街。そんな彼が学校劇用の脚本として書いたのが、今回扱った「ただの桃太郎」である。そこでは戦前・戦中と、逆コースが進行しつつある執筆当時との近似性が、「日本一」の旗印の存在により暗示されていた。

「日本一」の旗印を持つ勇敢な「桃太郎」話をもって国民の戦意高揚をはかった戦前・戦中。また、そうした「日本一」の旗印を再び立てるようなキナ臭い動きが、「保守反動的な児童読物の氾濫」

などを背景としながら徐々に進行している執筆現在。こうした両者の近似性を語り、再び戦争に加担させられる危険性を描くべく、奈街はあえて「日本帝国侵略主義の象徴」とされた桃太郎を学校劇の主人公にしたのである。ここに、「戦争責任」に対する奈街の「作品行動」の一端をみることができよう。

き じ 桃太郎さんは、これから、どうするんですか？

桃太郎 もちろん、ただの桃太郎になって、大いにはたらくよ。

さ る いぬくん、ほくたちと同じだねえ。ほくたち、はたらくものは、いつも、ただのさる、ただのいぬ、ただのきじだもの。

いぬ ほんとだ。それでこそ、りっぱにはたらくからね。
き じ ただの桃太郎さん、ばんざいですね。

桃太郎、笑ってうなずき、立ち上がる。 —幕—

引用は本脚本の末尾である。「日本一」の肩書や過去の一切を捨て、「ただの桃太郎」として「大いにはたらく」という桃太郎。ここには奈街が理想とする戦後日本の再出発のあり方が描き出されているといえよう。そしてまた同時に、戦時下は軍国調の思想注入に利用され、終戦後にも「日本帝国侵略主義の象徴」と揶揄されていた桃太郎の、児童文学としての再出発の願いが、ここには込められているのである。

付記

本研究は、平成二十一年度文部科学省科学研究費補助金(若手研究(B))「戦後台湾における桃太郎の調査」(課題番号20720067)の一部である。

注

- 1 関 英雄「第一次『日本児童文学』と戦責問題―本誌一五〇号にちなんで」(『日本児童文学』一九六九・五)。
- 2 戸塚文子「桃太郎の話」(『協力報』一〇九号、一九四八・七)。本資料は国立国会図書館憲政資料室「日本占領期検閲雑誌(メリーランド大学図書館ゴードン・W・ブランゲ文庫所蔵)一九四五年―一九四九年(昭和二〇年―昭和二四年)―マイクログロフィッシュ版」からの複写によった(以下「ブランゲ文庫マイクログロフィッシュ版」と略記する)。なお、「ブランゲ文庫マイクログロフィッシュ版」を利用するに際しては、占領期雑誌記事情報データベースプロジェクト委員会(代表・山本武利)作成「占領期雑誌記事情報データベース」を参照した。
- 3 山地延枝「(寓意随想)桃太郎」(『生活と文化』一九四六・一)。
- 4 引用資料は「ブランゲ文庫マイクログロフィッシュ版」による。
- 4 同様に桃太郎を戦争犯罪者と表現しているものに、白鳥省吾「終戦後の桃太郎」(『週刊河北』一九四六・四)、「ムカシムカシノムカシおとぎ話 その後の便り」(『延岡ロマンス』一九四七・三)などがある。これらの資料は「ブランゲ文庫マイクログロフィッシュ版」によった。
- 5 引用資料は「ブランゲ文庫マイクログロフィッシュ版」による。
- 6 鳥越 信「桃太郎の運命」(ミネルヴァ書房、二〇〇四・五)。
- 7 本脚本において桃太郎は、「一めんのやけ野原」を見て「うーむ、ひどくやられてるなあ。話にはきいていたが、まさか、こんなにひどいとは思わなかったよ」と感想を述べている。こうした思いは多くの

復員兵が持ったようで、「復員者・遣家族の思想動向に対する考察の一端」(第一復員局資料課、一九四六・四)を調査した木村卓滋(「復員軍人の戦後社会への包摂」吉田 裕編『日本の時代史26 戦後改革と逆コース』吉川弘文館、二〇〇四・七、九八頁)によると、たとえば愛知地方世話部管内の六七%(二四一九名)の復員兵が戦災による都市の荒廃を予想以上に悲惨なものと感じたという。つまり、ここでの桃太郎は多くの復員兵と同様の感想を漏らしており、その点からも典型的な復員兵として描かれているといえよう。

- 8 注7木村論文、一〇六頁。
 - 9 『月刊市ヶ谷』一九五三年七月号。引用は注7木村論文二〇四頁による。
 - 10 矢川徳光「民族問題と教育」(『教師の友』一九五二・一)。
 - 11 吉田 裕「戦後改革と逆コース」(吉田 裕編『日本の時代史26 戦後改革と逆コース』吉川弘文館、二〇〇四・七、六五―六六頁)。
 - 12 高山 毅「児童文学の危機」(『新児童文学』第四集、一九四九・一)。
- 引用は「日本児童文学別冊 復興期の思想と文学」(偕成社、一九七九・三、七九頁)による。